

地域日本語教室のネットワーク化

西 17 水井直光・尼崎中央日本語よみかき学級

1. 課題の背景および実践内容

尼崎市には下記の8つの地域日本語教室があるが、連携した動きは少ない。全ての属性の日本語の学習希望者を受け入れられるように、地域日本語教室の運営を効率化するためにネットワークを築く。そのために、各教室の現状をアンケート調査し、教室を個別訪問し、代表者と面談して、ネットワークへの参加への意向を確認した

表1 尼崎市内の地域日本語教室（[n]は定員）

団体種別	地域	名称	開催日	開催頻度	支援者数	学習者数
直轄事業	中央	中央日本語よみかき学級	木夜	1回/週	32	33
	小田	小田日本語よみかき学級	金夜	1回/週	18	11
	大庄	大庄日本語よみかき学級	水夜	1回/週	17	13
	武庫	武庫東プラザ日本語学級	土午前	1回/週	25	22
	立花	塚口日本語よみかき学級	火夜	1回/週	18	13
市民団体	園田	そのだ日本語サロン	木夜	1回/週		[15]
	園田	こんぺいとう	金夜・土午前	2回/週		
	中央	尼崎国際交流協会日本語教室	水木午前・木夜	4回/週		[各 30]

2. 地域日本語教室の活動実態調査

時間、等の制約を考慮し、尼崎市の直轄事業に属する教室のネットワーク化に絞った。尼崎市の多文化共生担当部署であるダイバーシティ課に本活動の趣旨を説明し、アンケート調査の協力を仰いだ。

(1) 支援者（ボランティア）

支援者の93%が中高年で、45%が65歳以上の高齢者であった。また75%が女性であった。令和2年度に市側が行った調査結果と照合する支援者の支援者数は全体としては若干減少しているが、増加した地域もある。

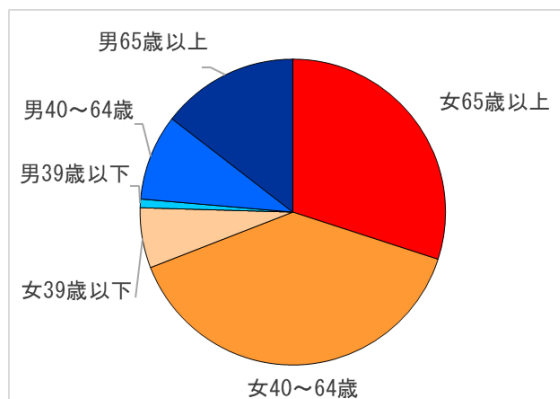


図1 年齢層別支援者数

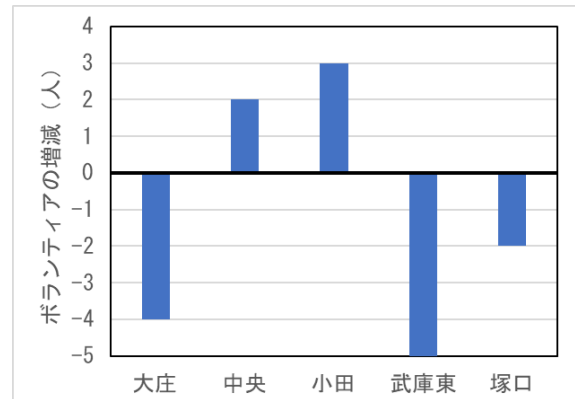


図2 令和2年度との比較による支援者増減

(2) 学習者

- ① 学習者の75%が40歳未満、また、児童生徒が約10%。男女の比率は半々。
- ② 言語はベトナム語、中国語が各々25%強。その他にフィリピン語、ネパール語が多く、4言語で70%を占めている。
- ③ レベル的には半数がゼロ初級・初級であった。
- ④ 生活者にパート労働者が紛れ込んでおり、実際の就労者は半数以上であったと考えられる。

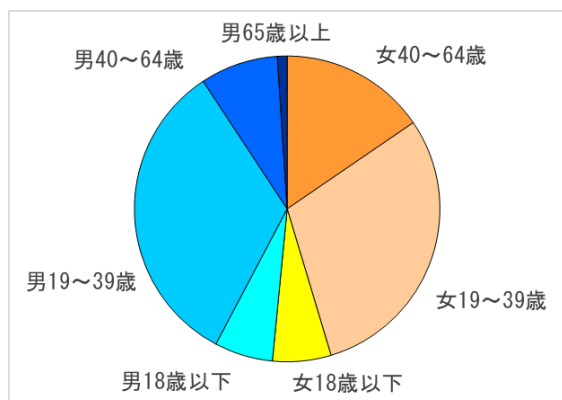


図3 学習者の性別、年齢層別比率

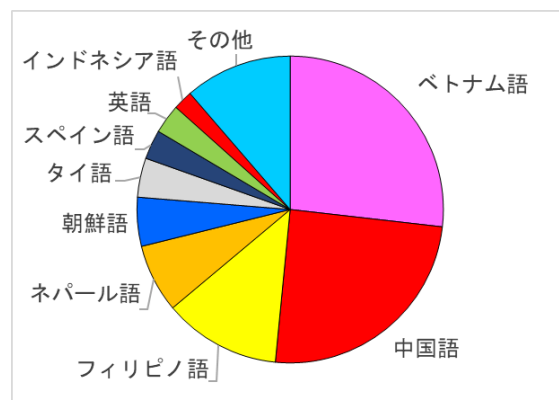


図4 学習者の母語

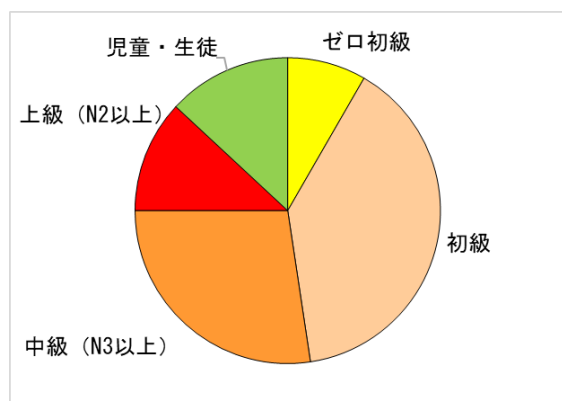


図5 学習者のレベル分布

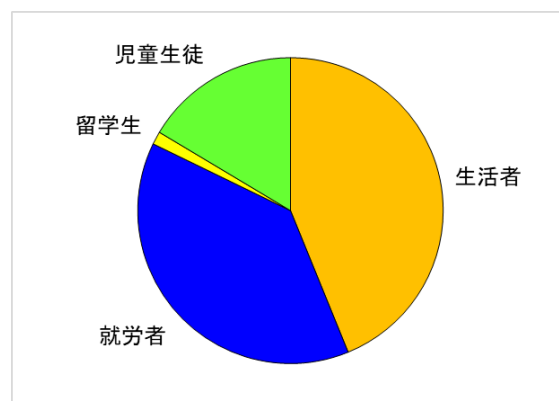


図6 学習者の属性

(3) 代表者との面談およびアンケートの結果

- ① 運営上の相違点・類似点
 - 1) 運営資金： 市の施設が直接管理運営している1教室を除き、4教室が社会福祉協議会から助成を受けている。更に1教室は県のボランティア助成(報告者は無理だと思っていた)も併せて受けている。
 - 2) 中上級者・JLPT対策： 全教室が中上級者を受け入れている。しかし、1教室を除き、JLPT対策は消極的で、教室内では日常の会話力の向上に重点を置いている。
 - 3) 児童生徒の受入れ： 1教室は断っている。1教室は8名と多いが、残り3教室は1~2名程度と消極的。理由は支援者が不慣れなこと、教科学習指導との兼ね合い難しいこと。受

け入れているいずれの教室も小学生以下には保護者による送迎を義務付けている。

- 4) コロナ禍で学習者が減少し待機者はゼロになり、支援者の積極的募集は行っていない。
- ② ネットワーク構築に関する賛同が得られた。ネットワークに期待することは以下の通り。
 - 1) 運営ノウハウや情報の共有、市への要望のとりまとめ
 - 2) 支援者のレベルアップ研修の共同開催
 - 3) 修了式、交流会、等のイベント共同開催

3. 地域日本語教育コーディネーターとしての役割

今回、コーディネーターとして何々をしたといえるようなことはできなかった。ただ、人を集めるきっかけを作れたのではないかと考える。

4. 地域日本語教育コーディネーターとして大事にしたい視点

ボランティア歴も日本語教師歴も10年に満たない私がいうのもおこがましいが、一言で言えば、「人を育てる」ということに尽きる。単に支援者のスキルアップと言うことではなく、活動の中心となる人材を育てるということである。

尼崎市の直轄事業の地域日本語教室は20年以上の歴史を持っている。活動を長く続けていくには、それを支えてくれる人材を確保する必要がある。今回訪問した教室の中には世代交代が進んでいるところがあり、経験の浅い代表はネットワーク化に積極的だった。教室運営に迷い、相談する相手や見本を欲しいと感じる時があるのだろうと思った。繋がることで代表も成長していくと期待したい。

更に、今回の教室訪問には、市の多文化共生の担当者も同行した。彼も担当になって1年未満で、教室を実際に見たことがなかった。今回の経験が、彼が有能な行政マンになる一助になればと思った。

もう一つ。支援者の視点で考えることを大事にしたい。今回、支援者の性別・年齢を調べて、中高年の女性の存在の大きさを再認識した。彼女たちの視点を考慮した運営でなければ、続けられないと感じた。

5. 実践において難しいと感じたこと

日本語学校の教師としての仕事や私生活の雑事に気を取られたいううちに、時間だけが過ぎて、コーディネーターとしての活動が停滞してしまった。今後、計画をもっとしっかり立てて、活動できるように気を付けないといけないと反省した。

以上